食に関連するタブーと俗信

黒 田 学

東北大学医学部公衆衛生学教室

Taboo and Superstition in Dietary Habits

Satoru KURODA

Department of Public Health, Tohoku University School of Medicine, Sendai, Miyagi

An enquete survey on taboo and superstition in dietary habits was conducted for 435 nutritionists living in Miyagi Prefecture in April, 1975.

(1) The number of informations, in which something about taboo or superstition described, was 160. Most of them were concerned with diet of local people on prohibition of use of animal meat, cucumber, eel or a kind of beans.

The chief source of informations was the nutritionists working in the community health activity.

(2) The food prohibition was reported to exist not only in rural, but also in urban areas, and the prohibitive regulation seems to have become weak along with the proceeding of modernization in the society.

(Received October 17, 1975)

ひとびとの食習慣の形成とそれに伴う栄養摂取上の問題を考えるうえで、食に関連するタブーと俗信を知ることが欠かすことができない。しかし、保健活動に従事する専門家にとっては、タブーも俗信も、いわば「逃げ水」のごとき現象として現われることが多く、その実態は必ずしも明確にしがたい。

本研究は、宮城県内において、食に関連するタブーと俗信が依然として存在しているという前提に立って、それがどこに、どのようなものとして存在しているかを知らうとしたものである。この前提が誤りでなかったことは、調査の進行によって明らかとなったが、調査開始前の時点でも、たとえば、散発的ではあるが、農村地区の食生活改善推進員などがその事例を報告したことがあり、十分に根拠のある前提と考えられた。

全県を対象とした調査にあたって、どのようにして情報を収集すべきかが第一の問題点であった。たとえば、各地区で自主的に活動している食生活改善推進員に質問調査を行なうことも一つの方法として検討されたが、このひとびとがタブーや俗信を他人に知られたくないと考える可能性のあることが障壁となると判断した。その意味では、各地区で働いている栄養士に対し質問調査を行なうことが得策と考えられた。しかし、栄養士の場合、その土地で生まれ育ったものでないことが多く、必要とする情報への距離が遠いことが反面欠点となる。

ところで、近年、食に関連するタブーの調査が、散発

的にではあるが世界各地ですすめられている。たとえば、妊娠分娩時の食のタブーに関して、マレーシアの漁村で行なわれた調査¹⁾では、現実の栄養摂取量と栄養所要量とが比較され、タブーが栄養摂取を抑制していることが指摘されている。また、妊娠・分娩・産褥・授乳・月経の各期間中および思春期における食のタブーに関して、西インド・タミルナド地方において行なわれた調査^{2)~4)}では、菜食者など、独自の食習慣を保持する集団ごとに、タブー成立の背景について心理学的考察が加えられている。また、魚に関する食のタブーの成立経過に関して、アフリカ北東地域やインド・チベット地域において、歴史学や生態学の立場からの調査⁵⁾⁶⁾がみられる。この種の調査は、人類学的方法（参与観察法など）を用いていることが多く、著者が今回とりあげた方法とは質的に異なっている面が多い。著者は、ある小地域をとりあげ、その内部に立ち入っての調査を行なうことも考慮しており、その方法による若干の事例研究も行なっているが、それについては別に報告する予定である。

本報告では、したがって、地域に配置された栄養士という情報収集源を用いての横断的調査にかぎって報告する。

調 査 対 象

宮城県内に居住する栄養士（管理栄養士を含む。以下、たんに栄養士という）435名を対象とした。

栄養士の勤務の業態を病院給食、学校給食、その他の

表1. 栄養士の勤務の業態別の状況

区 分	No.	%
病 院 給 食	173	39.8
学 校 給 食	65	14.9
施設等の給食	66	15.2
地 域 活 動	80	18.4
そ の 他	51	11.7
計	435	100.0

表2. 栄養士の生活の場所別の状況

区 分	勤務地の所在		自宅の所在	
	No.	%	No.	%
仙 台 市	188	43.2	181	41.6
仙台市以外 の市部	115	26.4	106	24.4
郡 部	132	30.4	148	34.0
計	435	100.0	435	100.0

施設等の給食に従事しているもの、地域活動に従事しているもの、およびその他の5群に分類して観察すると、表1に示すように、病院給食には、173名、約4割が従事していてもっとも多く、給食従事者は総数が300名をこえて、全体の7割を占めている。地域活動に従事しているものは80名で、全体の2割弱にすぎない。

栄養士の生活の場所を、仙台市、仙台市以外の市部、および郡部の3群に分類して観察すると、表2に示すように、勤務地の所在についても、自宅の所在についても、全体の4割強が仙台市にあり、郡部は3割強にすぎない。一方、昭和49年10月1日現在の宮城県推計人口によって人口の分布をみると、仙台市31%、郡部40%であるから、栄養士は相対的に都市部に集中しているといえる。また、郡部についてみると、自宅のあるもののほうが、勤務地のあるものより16名多い。

対象者の把握にあたっては、日本栄養士会宮城県支部会員名簿と、宮城県保健所市町村栄養士名簿を用いた。

調 査 方 法

図1に示した調査用紙を、返信用封筒とともに、原則として自宅に郵送し、約20日後の期限まで、郵送により回報するよう求めた。

食習慣特に食物禁忌に関するアンケート

東北大学医学部公衆衛生学教室

食習慣のなかで食物禁忌(フードタブー)がどうなっているか、日常業務のうえで気づきの点はありませんでしょうか。

どんなに細かいことでも結構ですから、ぜひ教えてください。

つぎの番号に○印をつけてください。

1 知っている。 2 まったく知らない。

↓(つぎのことについて記入) ↓(概ねしく知ったり、思い出した時には、お知らせください。)

	その1	その2	その3
イ 食物あるいは料理の名は			
ロ 地区名は			
ハ 全部の家ですか 特定の家族だけですか			
ニ 家族全員ですか 特定の家族だけですか 特定の状態の人だけですか			
ホ 一年中ですか ある期間だけですか			
ヘ むかしのことですか 今でも続いていますか			
ト あなたのこまめや、飲み 事項をお書きください			

あなたの	お名前	電話 局	番・内線 番
おねがい：3月10日までご回答ください 用紙が足りない時には余白をご利用ください			

B-3 利

図1. 調査用紙

図2. 栄養士の勤務の業態別回報等の状況

なお、この調査は昭和50年4月から5月になされた。

回 報 状 況

435名の対象者のうち、103名から回報が得られた(回報率: 23.7%)。

これを栄養士の勤務の業態別にみると、図2に示すように、回報率では、地域活動に従事している栄養士(以下たんに地域活動群という。他の業態についても同じ)の32.5%、施設等の給食群の33.3%がめだっており、他の3群にくらべて高率である(いずれも $p < 0.05$)。また、回報のうち、タブーや俗信に関する情報を含んでいる回報の割合をみると、地域活動群の92.3%が有意に高率である($p < 0.01$)。

なお、栄養士の生活の場所別にみると、回報率は、勤務地の所在についても、自宅の所在についてみても、仙台市、仙台市以外の市部、および郡部のいずれもが、ほぼ同じ割合を示しており、有意差は認められない。しかし、情報を含んでいる回報の割合をみると、勤務地の所在については、仙台市は郡部に比べて明らかに低く($p < 0.05$)、また自宅の所在についても、仙台市は他の2群にくらべて、これも低率であって、いずれも有意差が認められる($p < 0.05$)。

そこで、勤務の業態と自宅の所在の場所との2要因が、回報率と情報を含んでいる回報の割合に対しどのような影響を与えているかを、2元配置による分散分析によって検討を加えた。数値はすべて、逆正弦変換を行なったうえで計算したが、その結果は、回報率では勤務の業態のほうがより大きく、また発送数に対する情報を含んでいる回報の割合、および回報数に対する情報を含んでいる回報の割合については、勤務の業態のみが有意の変動要因となっていた(表3)。

結 果

提供された情報は、総数160件であり、提供者1人あ

表3. 栄養士の勤務の業態と自宅の所在に関する分散分析・F値(2元配置)

区 分	勤務の業態	自宅の所在
回 報 率	36.72**	5.17*
情報提供率	9.11**	1.21
情報数/回報	5.61*	1.88

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$.

表4. このたび提供された情報の内訳

区 分	No.	%
食べてはいけない食品に関するもの	145	90.6
栽培してはいけない植物に関するもの	12	7.5
飼養してはいけない動物に関するもの	2	1.3
そ の 他	1	0.6
計	160	100.0

表5. 食べてはいけない食品に関する情報のタブー・俗信別の状況

区 分	No.	%
タブーと思われるもの	113	77.9
俗信と思われるもの	27	18.6
記載内容からはいずれとも区分できないもの	5	3.5
計	145	100.0

たり平均2.5件である。

これを、食べてはいけない食品、栽培してはいけない植物、飼養してはいけない動物等に分類すると、表4に示すように、大部分は、食べてはいけない食品に関する情報である。

食べてはいけない食品に関する145件の情報を、タブーと思われるもの、俗信と思われるもの、および記載内容からはいずれとも区分できないものと3群に分類を試みると、表5に示すごとくである。分類の基準は、日本民俗事典の禁忌⁷⁾および俗信⁸⁾についての記載を参考とし、タブーと思われるものには、ひとびとがそれを神聖なものとするか、あるいは不浄なものとするかのいずれかの理由によって、さらには、それら神聖なもの

表6. 食べてはいけない食品に関する情報の市部郡部別・現在過去別の状況

区 分	No.			%			%		
	市部	郡部	計	市部	郡部	計	市部	郡部	計
現在も行なわれている	23	90	113	57.5	78.9	73.4	20.4	79.6	100.0
昔のことである	15	15	30	37.5	13.2	19.5	50.0	50.0	100.0
そ の 他	2	9	11	5.0	7.9	7.1	18.2	81.8	100.0
計	40	114	154	100.0	100.0	100.0	26.0	74.0	100.0

備考 1) 宮城県内の地名を記載した 120 件について、2) 広域地域名の記載例を含み、のべ 154 件となる

るいは不浄なものに関連するものと認めていることによって、摂食が抑制されている場合をとりあげた。また、俗信と思われるものには、タブーの場合ほど明瞭に、清浄・不浄あるいは聖・俗の観念と結びついていないものを含めることとした。いわゆる食い合わせについては、俗信に分類した。実際には、情報の記載がこれらの点について必ずしも十分でなく、ときにより恣意的な分類となった。提供された情報がタブーの範ちゅうに属するかあるいは俗信とすべきかは、より精細な個別の調査によらなければ明らかになしえない。そのため、本報告では、まとめていわゆる禁忌として扱った。

食べてはいけない食品に関する 145 件の情報のうち、宮城県内の地名を記載した 120 件を、市町村別および現在過去別に整理すると、表6のごとくである。整理にあたっては、異なった情報提供者によるものでも、同一地域に関する判断される情報は統合し、また広域地域名が記載されている場合は、そこに含まれる市町村ごとにそれぞれ算定することとした。

さらに、都市農村別の分布の状況を検討するため、市町村別第1次産業就業者割合（昭和45年国勢調査）と並

表7. 食べてはいけない食品に関する情報の食品の種類別の状況

区 分	No.	%
四足・二足	40	27.6
きゅうり	17	11.7
うなぎ	16	11.0
あずき	6	4.1
たにし、たまご、せり、たこ	各 4	省略
さかな、かぼちゃ、さけ、 たら、かき、なす、もち	各 3	省略
そ の 他	29	省略
計	145	100.0

置して示すと図3のごとくであって、農山漁村のみでなく、宮城県内のいたるところに存在していることがわかる。

食べてはいけない食品に関する 145 件の情報を、食品の種類別に分類すると、表7のごとくである。件数の多

図3. 市町村別にみた情報分布状況と第1次産業就業者割合との関連

表8. 現在も四足・二足を食べないとする 25 件の情報の分析

分析事項	区 分	No.	%
地域内の ひろがり	特定の家のみ	13	52.0
	全 戸	7	28.0
	記入のないもの	5	20.0
	計	25	100.0
家族内の ひろがり	全員が守る	12	48.0
	特定の人が守る	4	16.0
	若い人は食べる	4	16.0
	妊婦が守る	1	4.0
	記入のないもの	4	16.0
	計	25	100.0
禁止の期間	年間を通じて	9	36.0
	正月の期間	6	24.0
	服喪期間	4	16.0
	盂蘭盆	2	8.0
	彼岸の時期	1	4.0
	正月と命日	2	8.0
	妊娠期間中	1	4.0
	計	25	100.0
禁止の場所	よそで食べるのはかまわない	2	8.0
	屋外で煮炊きすれば差し支えない	1	4.0
	記入のないもの	22	88.0
計		25	100.0

備考：宮城県内の情報のみ

い順に列举すると、四足・二足の動物 40 件、きゅうり 17件、うなぎ 16 件、あずき 6 件が上位に並び、この 4 種類ですでに過半数 (79/145) を占めている。このほか、4 件ずつの 4 種類、3 件ずつの 7 種類などが続いている。

四足・二足の動物を食べないとする 40 件の情報のうち、宮城県内の地名が記載され、しかも現在もなお存在している 25 件について、地域内のひろがり、家族内のひろがり、禁止の期間、および禁止の場所について分析すると、表 8 に示すごとくである。すなわち、地域内においては、いわゆる旧家や老人のいる家など、特定の家の 13 件がもっとも多いが、全戸とするものも 7 件みられる。家族内のひろがりについては、全員が食べないとする 12 件が、ほぼ半数を占めている。「老人などの特定

表9. きゅうりを食べないとする17件の情報の分析

分析事項	区 分	No.	%
地域内の ひろがり	全 戸	8	47.1
	特定の家のみ	6	35.3
	記入のないもの	3	17.6
	計	17	100.0
家族内の ひろがり	全員が守る	10	58.8
	家長が守る	2	11.8
	老人が守る	1	5.9
	記入のないもの	4	23.5
	計	17	100.0
禁止の期間	祭礼に奉納する以前の期間のみ	9	53.0
	年間を通じて	5	29.4
	記入のないもの	3	17.6
	計	17	100.0
過去現在の別	現在も行なわれている	11	64.8
	昔のことである	3	17.6
	そ の 他	3	17.6
	計	17	100.0

の人が食べない」とする記載と、「若い人は守らない。食べる」という記載は、家族内のひろがりという点で、おそらく内容はほぼ同じであろうと推定される。禁止の期間については、年間を通じてとする情報が、9 件、36%提供されているが、期間を限定している情報は、正月の期間と、葬送にかかわる期間との 2 種類に、ほぼ大別できる。妊婦および妊娠期間にかかわる 1 件は、宮城県北西部に位置する山村における、兎肉を食べてはいけないとする情報である。なお、禁止の期間には、ある特定の時点における 1 食だけのものから、1 カ月間に及ぶものが含まれている。禁止の場所については、許容される場合が 3 件あげられている。そのうち、自宅以外の場所で食べるのはかまわないとする 2 件は、いずれも年間を通じて守られている例で、ともに、「若い人たちはよそで食べる」と添記されている。

きゅうりを食べないとする 17 件の情報を、四足・二足の場合と同様の観点から分析すると、表 9 に示すごとくである。ある地域内におけるひろがりについては、全戸と記載した 8 件がもっとも多く、特定の家とする 6 件がこれに次いでいる。しかし、この地域的なひろがり方

については、情報提供者の認識によって変わるようで、大字程度あるいは小字名と思われる地名を記載した例では、大多数が「全戸」と記載され、市町村名や市町村合併前の旧町村名と思われる地名を記載した例では、「(氏子など) 特定の家」と記載されているものが多い。これらは、児童信仰や天王信仰などに関係して、氏子が守らなければならないとされている例が多い。禁止の期間については、祭礼に初物を奉納する以前の期間にのみ食べられないとする情報が過半数を占めており、祭礼の時期を記載したものなかでは、6月が多い。しかし、年間を通じて、あるいは一生涯のあいだ食べられない例も少なくない。宮城県の上三陸沿岸に位置するある漁村(〇町M落部)では、住民のほぼ全員が、現在も年間を通じて守り続けていて、学校給食に際しても、その部落の児童のみはきゅうりを食べ残すという事例が提供されている。全数17件のうち、11件は現在も存在していることがわかる。なお、栽培も禁止されている例が1件含まれている。

うなぎを食べられないとする情報は、宮城県北東部の農村地帯を中心に、16件が提供されている。このうち、農村地帯にあるT町(人口1万5千人、第1次産業就業者割合60%)について、ほぼ同じ内容のものと推定される4件の情報が、同町居住者ではない4名の栄養士からそれぞれ個別に提供されている。16件のうち、10件は虚空蔵菩薩信仰との関連が深く、氏子のうち十二支のある特定の年に生まれた者は一生涯食べられないという内容が記載されている。この十二支については、丑年、寅年、巳年の3種類がみられる。なお、4件については、「うなぎの絵馬を奉納すれば許される」と添記されている。

あずきまたはあんこもちを食べられないとする情報は、宮城県北東部の農村地帯を中心に、6件が提供されている。いずれも、ある特定の家では、家族全員が、正月の期間には食べられないとする内容が記載されている。禁止の期間については、正月の3日間のものから、正月の15日間に及ぶものが含まれている。禁止の場所については、許容される場合が1件あげられていて、「自宅以外の場所で食べるのは差し支えない」と添記されている。なお、もち(たんにもちのみ記載されている)を食べられないとする情報が、ほかに3件提供されている。しかし、禁止の期間はいずれも正月以外の時期であって3件ともそれぞれ異なっているうえに、存在している地域も、宮城県南部地域や福島県と記載されていることなどから勘案すると、このたび提供された情報からみる限りでは、それぞれ別個の、異質の情報と推定される。

たにし(またはつぶ)を食べられないとする情報は、宮城県北西部に位置する農村の事例として、4件提供さ

れている。このうち3件は、小地域において、全戸が現在も守り続けているという内容のものであるが、細部については記載されていない。

このほかの食品については割愛する。

栽培してはいけない植物について、12件の情報が提供されている。1件について、1種類ないし5種類の植物名が記載されているが、重複している植物が多いので、全件を通じて、ねぎ、かぼちゃ、なす、ごぼう、とうもろこし、きゅうり、くるみ、ごま、およびさといもの9種類がみられた。なお、3件については、「食べてもかまわない」と添記されている。

飼養してはいけない動物に関する情報は、2件提供されている。うち1件は、爪の割れた動物について、飼養してはいけないが、肉や乳は食べても差し支えないとする事例である。他の1件は、にわとりの飼養にかかわる情報であるが、食べることにについては記載されていない。

その他の1件は、岩手県下における農村家庭衣食住実態調査報告(1956年)の一部を、参考資料として提供されたものである。

考 察

文化は生活習慣に多様な影響を与える。ひとびとの持つ各種の信仰は文化の一つの表現型と考えることができるが、それが素朴な土着信仰であれ、あるいはまた、高次の宗教の形態をとる場合であっても、いろいろな内容の食に関連するタブーがそれによって説明されることが多い。タブーは、ある社会における社会的制度の一つとして理解され、しかも、それを破ることに對し、社会的懲罰が課せられることを特徴としている^{9)~12)}。

本邦では、最近、九州地方において、「食物タブーの調査研究¹³⁾」と題する報告があり、また東北地方においても、「東北民俗資料集(一)~(四)¹⁴⁾」が刊行され、そのなかに食に関連するタブーが記述され、あるいは、古老たちからの聞き書きの一部として触れられてはいるが、いずれも散発的記載に留まっている。

著者は、宮城県内において、食に関連するタブーと俗信が依然として存在するという前提に立って調査を開始した。提供された160件の情報のうち、食べてはいけない食品に関するもので、さらに宮城県内の地名を明記した120件の情報を分析したところ、現在も行なわれているものは73.4%、市部に存在しているものは26.0%を占めており、第1次産業就業者割合の高い農山漁村ばかりでなく、市部(仙台市など11市)をも含む県内いたるところに存在していることが判明した。県都である仙台市(人口約55万人、第1次産業就業者割合約5%)においても、現在なお、7種類のタブーまたは俗信が存在

しており、著者の前提は正しかったと考える。

四足・二足の動物の摂食のタブーは、このたびの調査において、提供された件数をもっとも多かった。ここでとりあげておくべきことは、いわゆる旧家ではない新しい家や若い人たちのあいだでは、このタブーが、現在では守られなくなっている傾向がうかがわれることである。このほか、自宅以外の場所における摂食が許容されたり、あるいは、葬送習俗としてのいわゆる精進おとしが早められて行なわれるなど、禁止の期間が短縮される傾向にある。

一般的に観察すると、タブーを社会内部に保持する力は、時代の進展に伴って減弱しつつあるようにみえる。しかし、個々のタブーについては、その保持されている状態のいろいろのものが含まれている。

きゅうりを食べないとするO町M部落の例では、前述の全般的傾向に反して、小学校児童のような若年者が、学校側の給食指導にもかかわらず、同部落の児童のみがそろって食べ残すという。これは、きゅうりの摂食のタブーが全住民に深く浸透し、強力に保持されている例である。

うなぎを食べられないT町の例では、ほぼ同一と思われる内容について4名の情報提供者が存在しており、宮城県内ではよく知られた、有名なタブーと思われる。

栄養士を対象にしたアンケート調査を実施したことについて、ここで考察を加えておきたい。すでに述べたように、宮城県内におけるタブーや俗信の横断的調査という観点からは、一応の成果を得ることができたといえる。この調査によって、総数160件に及ぶ情報を得ることができ、これに基づいて、小地域における事例研究に発展させること、ならびに、栄養士の勤務の業態別に情報収集源としての意義を検討することが可能であった。有用な情報を多く提供する要因としては、勤務の業態が有意の変動要因であることが判明し、地域活動に従事する栄養士の特異性が浮彫りにされた。地域活動を行なっている栄養士は、地域住民の日常の食生活（広義の）の現況をまず把握することにはじまり、各種のプログラムを企画したうえで、地域内にはいりこむことによって栄養指導に従事している。そのために、他群にくらべて、相対的にタブーや俗信への距離が近いことは明らかである。

なお、施設等の給食群が地域活動群に近い態度を示している理由として、著者はまず人事交流の影響をあげたい。一般に、病院給食群や学校給食群の人事移動は、現状では閉鎖的であるのに反して、公立の福祉施設等（今回の調査では施設等の過半数を占めている）に勤務する栄養士と地域活動に従事する栄養士は、公務員としての身分が同一であるところから、人事交流（群間移動）が

かなり実施されている。そのため、地域活動経験者が施設等給食群のなかに含まれている。さらに、分類の便宜上、栄養士や調理師の養成機関（大学など）の勤務者もこの群に含めたが、実際には、これらの勤務者から多くの有用な情報が提供されていることを付言したい。

結 語

本研究は、宮城県内において食に関連するタブーと俗信が依然として存在するという前提に立ち、栄養士を情報収集源として横断的調査を実施したものである。

1) 宮城県内に居住する栄養士435名に対し、昭和50年4月にアンケート調査を実施した（回収率：23.7%）。

2) 提供された160件の情報のうち、食べてはいけない食品については145件、90.6%であり、そのうちタブーと判断されるものは113件、77.9%を占めていた。

3) 食べてはいけない食品に関する情報を分析したところ、現在も行なわれているものが73.4%を占めていること、および、都鄙の別なく県内いたるところに存在していることが判明した。

4) 獣肉を食べてはいけないとする情報は40件のほり、そのうち、25件は現在も行なわれているものであった。この情報を新旧別等に分析してみると、タブーを社会内部に保持する力は、時代の進展とともに減弱する傾向にあることがうかがわれた。

5) 栄養士からの情報提供状況を分析したところ、タブーや俗信に関する有用な情報の回報という点では、地域活動に従事する栄養士がもっとも重要であった。

たえずご指導を賜った東北大学医学部公衆衛生学教室鈴木継美教授に深く感謝申しあげる。また、調査にご協力をいただいた日本栄養士会宮城県支部野口丑松支部長はじめ会員の栄養士各位に厚くお礼申しあげる。

なお、本研究の一部を、昭和50年度日本栄養・食糧学会東北支部大会において発表した。

文 献

- 1) Wilson, C.S.: *Ecology of Food and Nutrition*, 2, 267 (1973)
- 2) Ferro-Luzzi, G.E.: *Ecology of Food and Nutrition*, 2, 165 (1973)
- 3) Ferro-Luzzi, G.E.: *Ecology of Food and Nutrition*, 2, 259 (1973)
- 4) Ferro-Luzzi, G.E.: *Ecology of Food and Nutrition*, 3, 7 (1974)
- 5) Simons, F.J.: *Ecology of Food and Nutrition*, 3, 89 (1974)
- 6) Simons, F.J.: *Ecology of Food and Nutrition*, 3, 185 (1974)
- 7) 今野円助：「禁忌」（大塚民俗学会編），日本民俗事典，212（1972），弘文堂，東京
- 8) 宮田 登：「俗信」（大塚民俗学会編），日本民俗事

- 典, 401 (1972), 弘文堂, 東京
- 9) Frazer, J.G. (永橋卓介訳): *The Golden Bough* (金枝編) (1963), 岩波書店, 東京
- 10) Steiner, F.B.: *Taboo*, (1967), Cox & Wyman, London
- 11) Garine, I.D.: *Ecology of Food and Nutrition*, 1, 143 (1972)
- 12) Todhunter, E.N.: *World Reviews of Nutrition and Dietics*, 16, 286 (1973)
- 13) 園田直人, 野原常子: 栄養学雑誌, 33, 31 (1975)
- 14) 岩崎敏夫編: 東北民俗資料集 (一)~(四), (1971~1975), 万葉堂書店, 仙台
- (昭和 50 年 10 月 17 日受理)